



TITLE:

イルハンの冬營地・夏營地

AUTHOR(S):

本田, 實信

CITATION:

本田, 實信. イルハンの冬營地・夏營地. 東洋史研究 1976, 34(4): 563-590

ISSUE DATE:

1976-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153604>

RIGHT:

イルハンの冬營地・夏營地

本 田 實 信

遊牧民は季節移動を行う。通常は、春に行動を起し、家畜に草を食ませつつ溪谷を溯って山腹や頂上部に至り、ここで夏を過ごす。秋になると、山麓に降り、河川の下流域などの温暖な地で越冬する。この季節的循環運動は遊牧集團毎に規定されており、各部族は夫々自己の夏の牧草地と冬の住地とを持ち、一定の移動路に由って往返すると言われている。私は、ペルセポリスのあるマルヴェルダシートの平原一帯で、秋口に、天幕・家財道具の一切を駱駝や驢馬の背に載せ、羊の大群を伴って油田地帯のホゼスタン州に南下するガシュガイ族の人々に何度も會った。一度は傳手を求めて、イスファハーン南方の山中に彼等の一派であるダレシュリー族の夏の幕營を訪れたこともある。遊牧民の季節移動が年々一定していて、大規模に整然と行われることのあらましを見聞した。

彼等遊牧民の夏の牧地を *yāylāq*、冬の住地を *qishlāq* と言う。 *yāylāq*, *qishlāq* の語幹 *yay*, *qis* は既に突厥碑文に見出される。トルコ語 *yay*, *qis* の動詞形 *yayla-*, *qışla-* に名詞形成接尾辭 *-q* を付したのが *yāylāq*, *qishlāq* であって、これは十三世紀のモンゴル支配時代以降のペルシア文史書に頻出する。ここでは *yāylāq* を「夏營地」、*qishlāq* を「冬營地」と譯しておく。

さて、十三・四世紀にユーラシアを征服したモンゴル族は、その本土に於いては勿論、占領・支配した中國、中央アジア、南ロシア、イランの地に於いても遊牧民としての生活を維持し、君主は季節移動を續けた。大元ウルスの皇帝が大都を冬の都とし、上都に夏の宮殿を設けたことは、マルコポーロによって既に注意されている。チャガタイウルスのハン

はイリ河溪谷に於いて、ジュチウールのハンはヴォルガ下流域に於いて夫々冬營地・夏營地の間を季節に従って往返していたのである。イランの地を支配したフラグウールのハン達に就いては、他に比べて記録が備わり、その季節移動に關しても具體的な實態をかなり詳しく把握できそうである。この小論では、フラグウールの君主イルハン達の冬營地・夏營地に問題を限り、その制度としての意味を考えてみたい。イルハンの冬營地・夏營地は何處に在ったのか、その立地條件はどのようなものであったのか、イルハンはそこで何を爲したのか、冬營地・夏營地の制度はモンゴル人のイラン統治上どのような意義を有っていたのか、といった問題を考察してみよう。

モンゴル人が實地にイランの地理を知ったのは、チンギスハンの西征の際である。ジェベ、スブタイの兩將は、ホラズムシャー・ムハンマドを追跡して、イラン中央部のハマダンに達し、さらにアゼルバイジャン州を通過して、カフカズを北進している。ムハンマドの子ジャラルウッディーンが西北イランでホラズムシャー王國の復興を企てると、オゴタイ・カーンはチオルマグンを派遣して彼を討滅させた。チオルマグン麾下の遠征軍はゴクチャ湖付近に駐屯して、所謂タンマチ軍となった。この遠征軍に對する補給が契機となつて、東北イランのホラサン州經營が進捗し、所謂ホラサン總督府が成立した。ホラサン州はカーンの直轄領に編入され、オゴタイの宮廷には多數のイラン人が見られるようになった。グユク・ハンもイランから地中海への道を求めてエルチギデイを派遣した。次のモンケ・カーンの手許にはイランに就いての正確な情報が集められていたものと考えられる。フラグがアラムートの天險に據るイスマイル派を殲滅し得たのも、彼がイランの風土・地理を事前に知悉していたことに一因が求められよう。

フラグはバグダードを攻略した後、西北イランのアゼルバイジャン州に入り、さらにシリヤ作戰を実施した。兄モンケの計報に接すると、アレップから引き返し、一二六〇年六月 Akhlāt に歸還した。一旦はモンゴル本土への東歸を考慮したが、クビライ・アリクブカの争を聞いてイランの地に留まることにした。ここにフラグウールが事實上誕生した。なおフラグとその後繼者達はイルハン (il-khān=el-qan) の稱號をもつて呼ばれる。

フラグは「アム・ダリヤの岸からミスルの境に至るイランの地 (Iran-Zamin)」の征服を命ぜられた。このイランの地がフラグ・ウルスの領域となった。ハムドラーフ・ムスタウフィーの「心魂の歡喜」(Hamd-Allah Mustaufi, *Nuzhat al-Qulub*, ed. G. Le Strange, 1916 [以下 NOS. と略す] pp. 163—189.) の地理篇によれば、オルジェイト・ハンに時に首都 Sulāniyya を中心に整備された六王道の終點は、南は Najaf、東は Balkh 北の Amu Darya 畔、北は Bab al-Abvāb (= Darband)、西は Quniya、東南は Qays 島、西南は Qal'a Bira である。これを今日の地理で言えば、イランの地とは、イラン・イラク・アフガニスタン、ソ連のトルコマン・アゼルバイジャン・アルメニア・ジョージアの諸共和國、及び小アジアの東半部を含むものである (なお NOS. 21—22 参照)。このような廣大な地域を版圖とするフラグ・ウルスは、當初マラーガ、或はタブリーズを、後には Sulāniyya を國都としていたと言われる。マラーガ、タブリーズは夫々ウルミヤ湖 (今日ではレザ・エ湖と言う) の東北と東南にあり、いずれもその市内・周邊にはモンゴル期の遺跡・遺構が見出される。Sulāniyya は、テラン・タブリーズ鐵道の途中にあり、現在も豪壯なオルジェイト廟が往時を偲ばせる。しかし、これらの都市は國都 (dar al-mulk) と稱されはしたが、そこに宮殿・官衙が營造されて、君主・百官が政務を執行していた譯ではない。否、イルハンは特別の場合を除いては都市の城壁内に入らなかった。イルハンはモンゴル人として遊牧の生活を保持し、季節に従って夏營地・冬營地の間を移動していた。所謂國都には移動の往返に立ち寄るというものであった。國都の問題は別に考察するとして、イルハンの冬營地・夏營地の制度の究明に入ろう。

一二五八年二月バグダードを攻略してから、一二六五年二月 Jaghatu 河畔で死去するまでのフラグの行動は未詳の部分もあるが、彼の夏と冬の滞在地在を「ラシード・ウッ・ダーイン」の「集史」(Rashid al-Din Faqīr-Allah Hamadani, *Jāmi' al-Ta'wīkh*, ed. A. A. Alizade, Baku, 1957 [以下 JTA. と略す]) のフラグ・ハン紀の記事 (pp. 63—94) によつて調べてみると次のようになる。(以下の表に於いて冬の滞在期間は原則として當該年度から次年度にまたがる)。

(夏)

1258 Marāgha 到着

1259 Alātagh 通過

1260 [Akhlai 歸着]

1261 Alātagh

1262 Alātagh

1263 [Tabriz 歸着]

1264 ？

(冬)

？

[シリヤ作戦]

？

？

[セルケ戦]

Jaghātu-Naghātū

Marāgha, Jaghātū

この表からは、フラグが夏を Alātagh で、冬を Jaghātū で過したことがあることは判るが、冬・夏營地の制度が確立していたかどうか、明言はできない。

フラグの長子アバガは、一二六五年四月 Barahān 地方の Chaghan-Naur の地で即位すると、國事・軍事の整備を命令した。これに関連して「集史」には次のような記載がある (JTA. 102—103.)。

國都 [Tabriz] を王都と定めた。Alātagh と Siyahkuh とを夏營地と選定し、Arrān と Baghdād とを、時には Jaghātū を冬營地に [選定した]。

この記事によって、イルハンとしてアバガが自己の冬・夏營地を制度として定めたことが判る。夏營地としては、Alātagh, Siyahkuh の地が、冬營地としては Arrān, Baghdād, Jaghātū の地が選定されたことになる。

アバガハンの、即位から死去 (一二八二年四月) に至るまでの、冬・夏營地のうち、年次の明白なものを表示すれば (JTA. 103—164) 次のようになる。

1265 [セルケ戦]

Mazandarān

1266	?	Mazandarān
1267	?	Mazandarān
1268	?	Jaghātū
1269	Alātāgh, Siyāhkuh	Arrān
1270	[蘇ハラク戦]	Jaghātū
1275	?	Arrān
1277	Alātāgh	?
1278	[ヘラート行]	?
1280	[ホラサン行]	Arrān
1281	[シリヤ作戦]	Baghdād

「集史」のアバガ＝ハン紀は、アバガ＝ハンの行動に就いてなお詳細でなく、その冬・夏營地は、右表のように未詳の箇所が多い。しかし、前述アバガの冬・夏營地制定の記事とは合致する。なお、アバガ＝ハンは當初三年間毎冬を Mazandarān で過したことが、バグダードで越冬したのは最晩年にシリヤ作戦の歸途に於いて一回であったことを留意しておきたい。

次にアフマド（一二八二年六月—一二八四年八月）、アルグン（一二八四年八月—一二九一年三月）、ガイハト（一二九一年七月—一二九四年三月）三代のイルハンの冬・夏營地を「集史」によって表示する（JTA. 168—245）。

アフマド＝ハン

1282	Alātāgh	?
1283	Alātāgh	?

ハニシニニ

1284 c.

Arrān

1285 Sughurlūg

Arrān

1286 Sughurlūg, Alātāgh

Arrān

1287 Alātāgh, Sughurlūg

Arrān

1288 [蘇門答剌作戦]

Arrān

1289 Siyānkūh, Qūngūrūlāng, Sughurlūg

Arrān

1290 Alātāgh

Arrān

ガニシニニ

1291 Alātāgh

Arrān

1292 Alātāgh

Arrān

1293 Siyānkūh, Ūjān, Hashtrūd

Arrān

1294 Alātāgh

c.

この表から、冬營地が Arrān 地方に定まってきたこと、Alātāgh が夏營地として利用されることが多くなったことが判る。さらにアルグニニニが夏營地として Sughurlūg を利用していることも注意しておきたい。

ガイハトの後に立ったバイドゥは治世が短く（一二九五年四月―十月）、「集史」にはその本紀も立てられていないので、彼の冬・夏營地のことは省く。

ガザンニニ紀の記事は、「集史」に於いて最も詳しい。これを整理して、その冬・夏營地を次に表示する。（JTA. 286—369）。

- 1295 Arrān
- 1296 Tabriz, Ūjān, Marāgha
- 1297 Alātāgh
- 1298 Tabriz
- 1299 Sughūrīq, Ūjān, Tabriz
- 1300 Marāgha, Ūjān, Tabriz
- 1301 Alātāgh
- 1302 Tabriz, Ūjān, Hashrūd
- 1303 Marāgha, Ūjān, Tabriz
- Arrān の他に Baghdād で冬營していること、及び夏を
 この表からガザン・ハーン（一二九五年十一月—一三〇四年五月）が
 Alātāgh で過す以外に、夏季 Tabriz, Ūjān, Hashrūd, Sughūrīq, Marāgha の地を移動・通過していることが判る。
 次代のオルジェイト・ハーン（一三〇四年七月—一三二六年十二月）の冬・夏營地を、カーシャーニーのオルジェイト史 (Qā-
 shānī, *Tārīkh-i Ūljāyīta*, ed. Mahin Hamblī, 1969) によって表示せよ。

- 1304 Ūjān
- 1305 Qungūrūlāng (Sulāniyya)
- 1306 Ūjān
- 1307 Sulāniyya
- 1308 Sulāniyya
- 1309 Sulāniyya
- Mūghān, Arrān
- Mūghān, Arrān
- Arrān
- Arrān, Gāvbāri
- Arrāniyya
- Baghdād

1310	Sulṭāniyya	Baghdād
1311	Sulṭāniyya	Baghdād
1312	Sulṭāniyya	Baghdād
1313	Sulṭāniyya	Māzandarān
1314	Sulṭāniyya	Sulṭāniyya
1315	Sulṭāniyya	Mūghān, Arrān
1316	Sulṭāniyya	

即ち、オルジョイト・ハンクの夏营地は、彼自身の建設した首都 Sulṭāniyya と略々定まり、冬营地は前半期に Arrān、いで連年 Baghdād となり、後半 Māzandarān, Sulṭāniyya, Arrān などへ移る。

オルジョイトの後継者アブー・サイーフ・ハンク・ハーン（在位1317年四月—1335年十一月）の冬・夏营地は、ハーフェズ・アブー・ハーン「ハフイズ侯爵」(Ḥafiz-i Abrū, *Dhayl-i Jāmi' al-Ta'wārikh-i Rashidā*, ed. B. Bayānī, 1350) を典拠として次のように表わされる。

1317	Sulṭāniyya	Baghdād
1318	Sulṭāniyya	Qarābāgh
1319	Sulṭāniyya	Qarābāgh
1320	Sulṭāniyya	Qarābāgh
1325	Ūjān	Baghdād
1326	Sulṭāniyya	Baghdād
1327	Sulṭāniyya	Qarābāgh

1329 Sultāniyya

?

1331 Sultāniyya

?

1335 Sultāniyya

Qarābagh

このように見てくると、フラグよりアブーサイードに至る歴代イルハンの夏營地としては、初めは Alātāgh が、後には Sultāniyya が最も多く利用され、その他 Siyāhkūh, Sughurlūq, Tabriz, Ūjan, Hashrūd, Marāgha の地も夏營地若しくは夏季の通過地として利用されていたことが判る。冬營地としては Arrān, Baghdād が多く利用され、Māzandarān, Jaghātū も冬の住地であったことが判る。

それでは、これらの冬・夏營地が何處にあったかを、アバガニハンが「Alātāgh と Siyāhkūh とを夏營地に選定し、Arrān と Baghdād とを、時には Jaghātū を冬營地に選定した」という先述の記事を手掛りに調べてみよう。

先ず、夏營地の Alātāgh (「斑の山」の意) がトルコ東部のヴァーン湖東北山地 Ala Dau と比定されることは間違いない (G. Le Strange, *The Lands of Eastern Caliphate*, 1930 [西土 East. Caliphate と略す] pp. 183—184)。この地はティフラース河とフラス河支流との分水嶺を成す。この兩河の河源地帯である Alātāgh と就って Mustaufi は地理篇のアルメニア州の章で次のように記している (NQS, 101)。

Alātāgh は極めて良好な草地であり、水は豊富で、多くの狩獵場がある。モンゴルのアルグンニハンはそこに宮殿 (saray) を營み、夏は大方そこに居た。その税額は六五〇〇ディナールである。

Rashid al-Din とすれど (JTA, 68)。

「アラバニハン」は、六五七年 Ramadān 月二日金曜日 (= 1259. XI. 12) 鐵匠のめんと親の中車を率うて Shām に進發した。Alātāgh に到着すると、その草地を嘉賞して、そのを LBNASAJVT (綴字未詳) と名づけた。

とある。この Grigor of Akanc' の「諸の民の歴史」(History of the Nations of Archers, tr. R. P. Blake & R.

N. Frye, *H/AS*, 12, 1949, p. 343, 404) には次のような記載がある。

フラグ・ハンは神が己に王國、富、多大の食糧と騎士、全財産を授け給うたことを知ると、Darin の野に莫大な経費をかけて自分の宮殿を建てさせた。その地を彼等の言葉で *Alatay* と呼んだが、ここは嘗て大アルメニアの王族 *Arsha-kids* 家の夏の住居であった。

これらの記事によって、*Alatagh* が良好な草地であり、モンゴル人の占據前からアルメニア王が夏を過ごす場處であり、フラグがこの水草豊かな地に着目したことが判る。歴代のイルハンが *Alatagh* を絶好の夏營地とした所以も了解されよう。

次の夏營地 *Siyāhkūh* (「黒い山」の意) に就いてはなおその位置を的確に比定しかねている。バグダード遠征中のフラグの兵站部 (*aghrūq*) は *Hamadān*, *Siyāhkūh* 地方に置かれていたこと (JTA. 64) *Qarāuna* 萬人隊がバグダードで冬營し *Siyāhkūh* に夏營つづいたこと (志茂碩敏 *Tl. Khan* 國史料に見られる *Qarāunās* と「つづ」東洋學報五四一、七一八頁)、王子マルグンが *Alatagh* を出づ *Siyāhkūh* に宿營し、そこから *Hamadān* に使者を送つづいたこと (JTA. 170)、ガイハト・ハンが一二九三年、*Tabriz* から *Marāgh* を經し *Siyāhkūh* に向つづいたこと (JTA. 238) を考え合わせると、*Baghdād*—*Hamadān*—*Siyāhkūh*—*Marāgha*—*Alatagh* とする游牧モンゴル族の移動路が想定され、*Siyāhkūh* の位置はハマダーン—マラーガ間に求められよう。一方 *Mustaufi* の河川の條に (NQS. 223) *Jaghātū* 河は *Kurdistān* の山中の *Siyāhkūh* 村の地方に源を發し、*Marāgha* 地區を過ぎ、*Sāfi* 河と *Naghātū* (すなわち *Taghatū*) 河に合流し、*Tarūj* の鹽湖 (＝ウルミヤ湖) に注ぐ。

とある。これによって、*Siyāhkūh* は *Jaghātū* 河の上源地のクルディスタンの山中で、しかもハマダーンへの路線上に求められよう。一九七四年夏、私達の調査隊はこの附近で一般調査をしたが、*Siyāhkūh* に比定される場處を見出し得なかった。なほあたつての見當として、夏營地 *Siyāhkūh* を *Jaghātū*, *Qizil-Uzan* 兩河上源の山地に求むべきであらうと

しておく。

次に最も重要な冬營地 Arrān に就いて考えてみる。Mustaufi によれば (NOS. 90—92)‘

Arrān 州は Aras 河岸から Kur 河までの河間の地である。

つまり Baylagan, Barda, Ganjah, Hirak の諸都市を含む。そして Aras 河に流域右岸でカスピ海に臨む Mughān 州と列記されている。Mughān 州及び Bājarvān, Pilsuvār, Mahmūdābād, Hamsahrah の諸地區が含まれている。Arrān, Mughān 兩州の範圍は、今日の地理で言えば、ユクチャ湖以東のクル河の右岸一帯の地であり、アルメニア共和國の東部とアゼルバイジャン共和國の南西部とを含む廣大な地區である。イルハンの冬營地としての Arrān (Qishlaq-i Arrān) はこの地域の何處に置かれていたのだろうか。

冬營地 Arrān に關連して、「集史」にはいくつかの地名が見出される。例えば、ガイハトニハンがクル河畔に建設したところ Qutluğ-Bāligh, Arrān の Sarāy-i Maṣūriyya という宮殿、ガザンハンのオルドがあった Dālān-Nāūr の Jūy-i Nau, イルハンの遊牧地であった Qarābāgh, 宿營地の Abubakrābād の Pul-i Khusrāu, 及び Pul-i Manggū-Timūr や Bākū, 狩獵地の Şirvān, Lagistān, Gāvbari の平原, Darband の近く Khalizī (Qūsh-QIUN < Qūsh Qapū 「鳥の門」) 等々の地名が記されている。これらの場所の的確な位置は殆んど未詳である。封禁の制が嚴格に行われていたとは考え難い。地名比定の困難はやはりこの方面に就いての私達の歴史地理的知識の不足による。ただ、Mustaufi の地理篇の記事から多少の見當は附く。彼は Sultāniyya 及び Bab al-Abvāb (Dimūr Qāpi, Darband) に至る北王道の記載の中で次のように述べる (NOS. 180—181)。

Bājarvān から八ファルサングで Pilsuvār に至り、そこから六ファルサングで Jūy-i Nau に至り、そこから六ファルサングで Mahmūdābād-i Gāvbari に至る (一ファルサングは約六キロメートル)。

Mahmūdābād は、ガザンのイスラム教徒としての名前 Mahmūd に因んで名附けられた町で、彼自身の建設にかかる

(NOS. 91)。この記事から、ガザン・ハンの所謂 Arrān 冬營地の一つは、フラス河下流域右岸で Mughān 州のカスピ海岸寄りに位置し、さらにクル河を渡って、Gashasfi から Bakū あたりまでが彼の冬の狩獵場になっていたと考えられる。北王道上の Bajarvān から分岐し、Barda を經て Tiflis に至る支線に就いて、Mustaufi は次のように述べる (NOS. 181)。

Qarābāgh 道——Bajarvān から七ファルサングで、Alī Big 村に至り、そこから六ファルサングで Bakrābād に至り、そこから二ファルサングで Aras 河岸に達する。これが Qarābāgh の境界である。

さて Qarābāgh は Barda、西方の山地帯を指す (*Ḥudūd al-'Ālam*, 1970, tr. V. Minorsky, p. 203)。このゴクチャ湖東方の山地は、チョルマゲン、バイジュ以来のタンマチ軍の駐屯地であり、この方面がアバガ・ハン以降の冬營地となったものであらう。

このように見てくると、所謂 Arrān の冬營地として、フラス、クル兩河に挟まれた Arrān 州の Qarābāgh 山地と、フラス河下流域右岸の Mughān 州 Gāvbari 平原との二ヶ所があったことが判る。なお、私達の調査隊はタブリーズから Ahar 北方の Kaleibar に入り、Mughān の牧草地の一端を見ることができた。

フラグのバグダード占領後、イルハンとして初めてバグダードを冬營地としたのはアバガ・ハンであり、それは一二八一年の冬、シリヤ作戦からの歸途のことであった。その時彼はバグダード市内には入らず、Muhawwal に宿營した。Mustaufi によれば (NOS. 43—44)。

Muhawwal は Baghdād の西、二ファルサングにある小さな町で、Isa 運河の岸にある。その果樹園は Baghdād のそれから續いている。カリフ達はこのに多くの美しい宮殿を營んだ。

とある。ガザン・ハンもバグダード冬營の際には、Muhawwal に宿營し、その附近で狩獵を行い、聖者の墓に參詣したりしているが、『集史』によれば (JTA. 313)、一二九七年二月、

金曜日に *Sūq al-Sulṭān* のモスクで禮拜に參列した

とある。オルジエイトハンの時になると、バグダード市内に入るとは通常のこととなったようである。

アバガハーンが設定したもう一つの冬營地は *Jaghātu* である。「集史」のフレグハン紀に於ける (JTA. 90) 秋 (一二六三年) になると、*Zarrin-Rūd* の冬營地——モンゴル人は *Jaghātu*, *Taghātu* と呼ぶ——に向ひ、*Marāgha* に至って天文臺の竣功に力を盡した。

とある。*Zarrin-Rūd*, *Jaghātu*, *Taghātu* は今日の地圖にも見出される河名であり、*Jaghātu* はクルディスタン山中に發して、南からウルミヤ湖に注ぐ。*Taghātu* は *Jaghātu* の西支流である。冬營地は *Jaghātu* 河の下流域の *Sulḍus* の地あたりに設けられていたのであらう。

以上で、アバガハーンの設定した夏營地 *Alatāgh*, *Siyāhkūh*, 冬營地 *Arrān*, *Baghdād*, *Jaghātu* の大體の位置の比定を考えてみた。次にその他の、夏營地 *Marāgha*, *Tabriz*, *Ūjān*, *Sughartūq*, *Qūnqūrlang* (= *Sulṭāniyya*), 冬營地 *Mazandarān*, *Hūlān-Mūrān* の位置に就いて簡単に述べておへ。

マラーガ、タブリーズ、*Ūjān* の位置に就いては問題なら (East. Caliphate, Map III)。ただこれらの都市は恒常的な夏營地ではなく、冬・夏營地間の移動中、春、又は秋に立ち寄るのが通常であり、その際にも市内に入るのは、モスクでの禮拜 (*namāz*) に出席するなど、特別の場合のみであった。ガザンハーンがタブリーズの西郊の *Sham* に *Ghāzāniyya* を、その宰相ラシードウッディーンがその東郊に *Ra'b-i-Rashidi* を建設したのは、十四世紀に入るとイルハーンのタブリーズに對する關心が一層深まったからである。因に *Ghāzāniyya* は整地されて今は跡方もなく、*Ra'b-i-Rashidi* は史蹟として保存策が講ぜられつつある。*Ūjān* (タブリーズの東南八フルサングの地) には良好な草地があったが、ガザンハーンはこの地に新に都市を建設し、*Shahr-i-Islām* (イスラムの町) と呼んだ。なお、*Hashtrūd* は「マラーガ、*Ūjān* の近傍の山地に發源し、*Miyānuj* 付近で *Safīdrūd* と合流する」(NQS. 224) 河である。イルハーンの夏營地は、*Sahand* 山南麓を

東に流れる Hashrud の流域にあった Yüzgāhāi の地に設けられていたのであらう。Marigha に就いては、その郊外の天文臺（發掘調査が終り、現在史蹟として保存）をイルハン達が屢々訪れていることが注目される。

次の Sughurluq (NOS. 64 の STURIQ という綴字は不正確) は、アルグン、ガザン父子の好んだ夏營地であり、現在の Takht-i Sulaimān に比定されることは殆んど間違いない (Minorsky, *Iranica* 1964, 101)。Takht-i Sulaimān は Jaghatu 河に東から合流する Saruq 河の上源にあり、ドイツ考古學隊が十數年發掘調査を續けている遺跡である (Takht-i-Sulaiman, hrsg. von H. Henning von Osten und R. Nauman, 1961)。火口湖（徑約百米）を中心にした圓形臺地（約三百×四百米）から成り、その周圍にはササン朝の石積み城壁が残っている。深綠色の池の北面にササン期の遺構（現在發掘中）があり、池を圍むようにしてモンゴル期の巨大な建物遺構群がある。現状の景觀からしても、イルハンの絶好の夏營地であり、大遊牧地 (yurt-i buzurg) であったことが想像される見事な遺跡である。

Qūngūrlang はモンゴル名で、元來は Sharūyāz と呼ばれた。アルグンハンがそこに都市の建設を始め、オルジェイタンがそれを完成させ、Sulāniyya と名付けて國都とした (JTA. 229, NOS. 55—56)。Mustaufi に拠る (NOS. 55)。

その周圍には、寒帯・溫帶の諸地域が一日程の距離にあり、人が必要とする物は何でもその地域で多量に供給される。極めて良好で豊富な草地と、立派な狩獵地がある。

とある。Sulāniyya は北流する Zanjan 河と南流する Abhar 河との分水嶺にあり、交通の要衝でもあった。

次に冬營地の Māzandarān に就いて一言しておく。マザーンダランはカスピ海東南岸の州名であって、イルハンの冬營地は Sulān-Duvīn-i Astarābād, Nim-Murdān と記述される。Sulān-Duvīn は Gūgān 河下流域左岸の Astarābād の東北にあり (Minorsky, *Iranica*, 3)。Nim-Murdān は「處 (jazira) であり、多くの人々がそこに住む Urūs, Gilan, Mazandarān からやって来る舟がそこに入る。そこは Astarābād から三ノールサングである」(NOS. 160) と述べる。

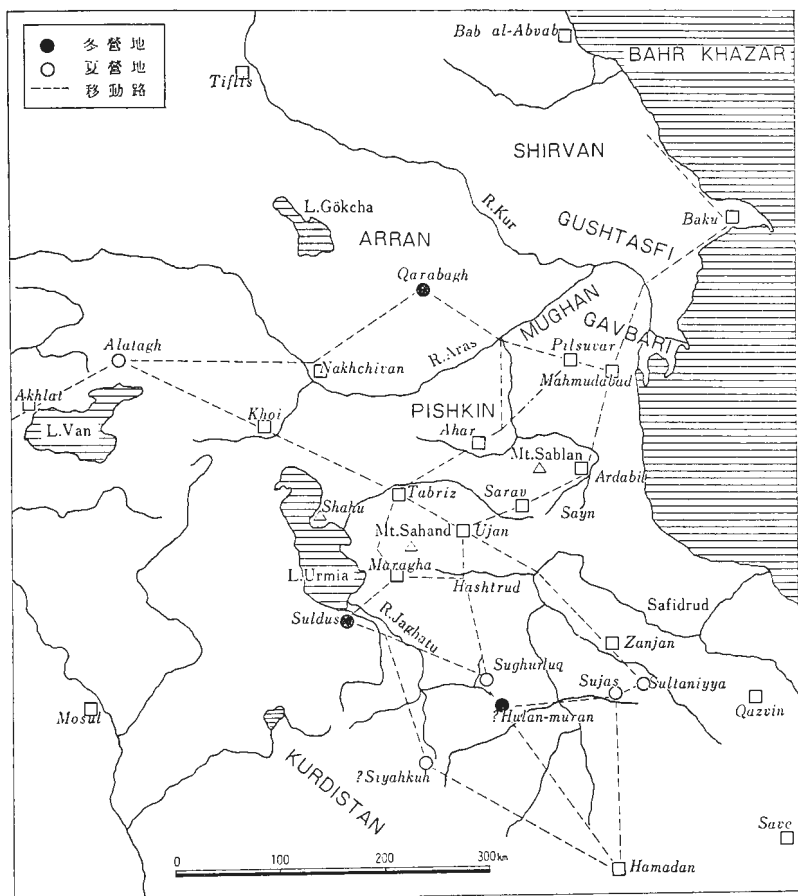
これらの所謂 Mazandarān の冬營地は、元來ホラサン太守に任ぜられたモンゴルの王子の冬營地であつて、イルハンがこの地で冬營するのは特別の場合に限られていた。

なおガゼン・ハンが最晩年に冬營した Hulān-Murān (トルコ名は現在の Qizil-Uzan) は、バグダード冬營への途上、積雪で移動不能となり、已むを得ず冬營地としたもので、臨時のものであつた。その位置は、Takt-i-Sulaimān から東に山越えした、Qizil-Uzan の支流の上源地に求められよう。

以上に調べたところから、イルハンの夏營地が河の上源地にあり、冬營地——バグダードを除き——が下流域に設けられていたことが確認されよう。即ち、アラス河支流の上源で、ユーフラテス河との分水嶺に Alāgh の夏營地があり、アラス河の下流域乃至クル河との河間地方に Arrān の冬營地がある。Jaghātu 河の河源地に夏營地 Siyāhkūh が、その下流域に冬營地 Jaghātu がある。ここに Jaghātu 河の支流 Saruq 河を溯ると Sughurlūg の夏營地があり、Zanjān, Abhar 兩河の分水嶺に Qūnqūrlang (=Sulāniyya) の夏營地があつたのである。

それではイルハン達はどうのような経路に由つて冬・夏營地間を移動・往返してゐたのであろうか。その詳細は別に論ずるとして、その大略を述べよう。Alāgh と Arrān との間は、(1) Tabriz—Ahar—Pilsuvār, (2) Nakhchivān, (3) Tabriz—Sāyn (Ardabil—Sarāv 間)—Pilsuvār を經由する三路線があつた。このうち Nakhchivān を經由の移動路は餘り使われなかったが、Pilsuvār, Sāyn の兩地はイルハンの移動路上の要地であり、屢々軍隊の集結地、クリルタイの開催地となつた。バグダードへは、タブリーズからマラーガを経てハマダーンに出るか、或はタブリーズから Ujān-Sughurlūg を經つてハマダーンに出、ハマダーンから Bistūn, Qaṣr-i-Shirīn, Khāniqin を經由の、所謂ホラサン道によつてバグダードに達した。ここに、タブリーズ—マラーガ—Ujān は、サハーン・山の周圍をめぐる一種の環狀線で結ばれてゐた。Tabriz—Jaghātu—Marāgha—Segunbed—Yūzāghāj—Hashtrud—Ujān—Tabriz は、イルハンが頻繁に利用した路線である。Marāgha は、西に Siyāhkūh、東南に Sughurlūg の道を通つた。Sughurlūg から Hulān-Murān, Sujās を經つ

イルハンの冬・夏營地と移動路



Qunqurūlang (=Sulṭāniyya) に至る移動路があった。オルジェイト=ハンが Sulṭāniyya を國都とし、ここを六大王道の起點とした後も、イルハンの移動路そのものには殆んど變更がなかった。イルハンの冬・夏營地とその移動路の要圖は前頁に示した通りである。

内戦や國外への作戦その他特別の場合を除いて、イルハンの行動範圍は、この要圖から判るように、冬・夏營地とその間の移動路内に限られていた。この範圍内にイルハンの生活があった。國事も宮廷の事もすべて冬・夏營地乃至は移動路上に於いて執行されたのである。その狀況に就いて次に述べてみよう。

まず、アバガ以降歴代イルハンの即位式の舉行された場處を調べてみると、次のようになる (K. Lech, *Das Mongolische Weltreich*, 1968, 322—323 參照)。

アバガ=ハン

Chaghān-Nāūr

(第一次—二六五年六月十九日)

Jaghātū

(第二次—二七〇年十一月二十六日)

アフマド=ハン

Alātagh

(二八二年六月二十一日)

アルグン=ハン

Yūrt-i-Sūktū

(第一次—二八四年八月十一日)

Arrān

(第二次—二八六年四月七日)

ガイハト=ハン

Akhlat

(第一次—二九一年七月二十三日)

Alātagh

(第二次—二九二年六月二十九日)

バイドゥ＝ハン

Hamadān

(一二九五年四月)

ガゼン＝ハン

Qarābāgh

(一二九五年十一月三日)

オルジェイト＝ハン

Üjān

(一三〇四年六月十九日)

アブーサイード＝ハン

Sultāniyya

(一三二七年四月)

Jaghātu, Arrān, Qarābāgh を冬營地¹⁾ Alātāgh, Üjān, Sultāniyya は夏營地である。アルグンの第一次即位地 Yürti-Suktu (Suktu の遊牧地) は Yüzaghaj 地圖の Ab-Shūr にあった (JTA.198)。即ち、この地はマラーガーÜjān間、サハンド山南麓 Hashrud 上源地にあり、イルハンの夏季通過地であった。ガイハートの第一次即位地 Akhlai は Alātāgh 夏營地の西、ヴァーン湖西北岸にあり (NQS. 100)。フラグがシリヤ遠征の際 Alātāgh の次に通過した地點である。アバガ＝ハンの第一次即位地 Chaghān-Nāur は、ンターダン東南の Barāhān 地區にあり、良好な狩獵地として知られていて (NQS. 69)。現在の Tuala 湖に比定される (East. Caliphate, 199)。イルハンの即位問題は、フラグ＝ウルの政權構造に係り、即位地の選定は即位に至る政情に左右されるのでこのようにまちまちであるが、冬・夏營地での即位式が原則であったと言えよう。

イルハンの最も重要な國事行爲はクリルタイの開催である。「集史」によって開催地と年次の明確なものを次に例示する。

- (1) 「アルグン＝ハン」春に [Arrān の Sarā-yi Mansūriyya を發つて] 夏營地に向いた。Sarāv と Ardabil の間の。

Sāyn の地で大クリルタイが開催された。六八四年 Raiab 月十一日 (=1285. IX. 12) Ārūq が Baghdād に派遣された。その後 Sūghurlūq が夏營した (JTA. 204—205)。

(2) 「ガイハト=ハン」 Ramadan 月廿日 (=1294. VIII. 1) に Alatagh に到着した。その地でクリルタイが開催された。その月の二十一日木曜日にクリルタイが終了した (JTA. 239)。

(3) イスラムの帝王「ガザン=ハン」は Tabriz から Sarāv と Ardabil の間にある Sāyn の草地に向って出發した。Sha'bān 月十七日水曜日 (=1296. VI. 20) にその遊牧地でクリルタイが始められた。十九日クリルタイは終った (JTA. 308)。

(4) 「ガザン=ハン」の王族は [Sūghurlūq, Qurbān-Shira を經つ Sha'bān 月二十五日 (=1299. VIII. 28) Ūjān に駐まった。王子 Kharbānda (=オルジェイト) がホラサン方面より到着した。兄弟は再會を互に欣び合った。クリルタイと宴會 (tūy) が開催された。クリルタイが終了すると Sha'bān 月二十八日 Iqbal が處刑された (JTA. 331)。

(5) 「ガザン=ハン」は Marāgha の天文臺から移動 (kūch) した。Ūjān 方面に來た。Shawwāl 月二十九日火曜日 (=1300. VII. 13) クリルタイが始められた。その終了後、六九九年 Dhī'l-Hijja 月三日火曜日 (=1300. VIII. 3) 王子 Ālūn が Ūjān で亡くなった (JTA. 339)。

(6) その後「ガザン=ハン」の王旗はイスラムの町 Ūjān に到着した。Dhī'l-Qa'da 月十二日 (=1303. VI. 28) にあたる「クリルタイの二日目に」裁判 (yarghu) の審理が開始された。〔中略〕結局 Dhī'l-Hijja 月朔日裁判は終了した。ハイバク=タルハンの子アグタイ=タルハンとマングート部のトガン=ティムールとが處刑された。大法令に従って全件が處理された。その後 Dhī'l-Hijja 月二日木曜日 (=1303. VII. 18) クリルタイの宴會が始まり、諸將は「罪を宥恕されて」叩頭の榮譽を許された (JTA. 359)。

フラグ=ウルスに於けるクリルタイの全容を未だ把握していないので、今は、上述の例示に留めておくが、開催地とし

て Alātāgh, Sāyn, Ujan の三箇所だけは確認せよ。このうち Sāyn の草地は、タブリーズ乃至 Ujan から冬營地 Mughan に至る途上「Sarāv と Ardabil の間」にあり、その位置はサブラン山南麓、Maidān-Chai 乃至 Sarāvūd の上源に求められよう。

クリルタイも、即位式同様、全王族・全部族長が出席して開催される建前であったから、開催の時期と場處の選定は疎かにできないことであった。クリルタイ前後の宴會 (tuy) に要する莫大な経費も考えなければならなかった。

裁判 (yargū) は、チンギスハンの法 (yasaq-yāsa) を遵守するイルハンの權威のもとに行われ、王族・部族長に就いては、上述のようにクリルタイで審理された。一例を引いておく。アフマドハーンがアルグン派を一掃しようとして起こした裁判に就いて、「集史」には (JTA. 178) 、

翌日、申の年 (1284) の初めの新年宴會 (gün-yanğılamishi) の早朝「アフマドハーンの命令で王子」Qunqurtai の命運が絶たれた。Arran の Qarabagh に於つてである。オルドを kuran (くりにん) 隊形に結び付け、六日間裁判を續けた。Kujuk-Unuqchi と Shadi-Aqtachi とが處刑された (JTA. 178)。

とあり、アルグンの進攻を前にしてのアフマド側の緊張した裁判が、Qarabagh の冬營地で行われた情景が判る。裁判・處刑の記事は「集史」の隨處にあり、フラグ・イルス政權の一面を語るが、その場處も、當然のことながら、冬・夏營地が多い。さらに vazir を始め重要な財務官僚はイルハんに扈從するのが常であったから、彼等の任免も冬・夏營地で發令されることが多かった。例えば、ガイハト治世末年の鈔 (chāu) 發行の責任者 Sadr al-Din Zanjāni に就いては、

六九一年 Dhī-Hijja 月六日 (= 1292. XI. 18) Arrān の冬營地に於いて王國の sāhib-divān 職は Sadr al-Din の上に定められた (JTA. 238)。

とある。やがてラシード=ウッディーンと争って失脚するに至ったが、その最期の模様は、次のように詳細に述べられている。

帝王〔ガザン〕は〔Kur〕河を渡って Juy-i Nau のオールドに宿營した。帝王が Dalān-Nāwūr にいた時、amir Qutughshah が Gurjistan から歸還し、その税糧の件で Sadr al-Din を追求した。〔中略〕Rajab 月十七日水曜日 (=1298. IV. 30) 〔ガザンの〕命令が出た、Sadr al-Din とその弟 Quib al-Din とが逮捕された。Rajab 月十九日金曜日 Sadr al-Din の裁判が行われた。〔中略〕帝王が Qutughshah と Sadr al-Din の命運を絶つよう命じたので、六九七年 Rajab 月二十一日日曜日午前 Juy-i Jandar に於いて、amir Sutar が彼の一方の手を、Pahlavān Malik Ghūrī がもう一方の手を捕え、amir Qutughshah がその腰を眞二つに切った (JTA. 326—327)。

その他、外國使臣の謁見、使節の派遣、國書に對する署名など外交に關する事柄に就いても、冬・夏營地で行われるのが通常であつた。對外作戰の基地に就いてはなお未詳と言う他ないが、ガザンハンのシリヤ作戰の際は、Üjan から進發したと考へてよい。閱兵に就いては、

〔ガイハハハンは〕Jumadi I 月二日 (=1294. III. 31) Kur 河畔に大きな町を建設し、それを Qutugh-Baliq と名付けた。冬營地から歸還して、Pilsuvar に於いて閱兵 ('arz-i lashkar) した (JTA. 239)。

とあり、Mughan 州の Pilsuvar が閱兵場に使用されたことが判る。

次に冬・夏營地乃至その間の移動路と、イルハンの財庫とはどのような關係にあつたのであろうか。

「集史」によれば (JTA. 65, 390)

フラグハハンは Baghdad から持つてきたあらゆる財寶を、Sahib-i Ray の amir Nasir al-Din 'Ala al-Din の手や、アゼルバイジャンに送つた。Mulāhida の諸城、Rūm, Gurj, Arman, Lūr, Kurd からの財寶を同様と〔送つた〕。Malik Majd al-Din Tabriz を命じて、Ürmī-Salmās の湖の岸にある Tala と呼ばれる山の上に、高い建造物を極めて堅固に作らせた。その全財寶を鎔解して、balish とし、そこに貯えさせた。

とある。この Tala は Shāh-Tala と呼ばれ、現在ウルミヤ湖東岸の Shāhī 島に残っている山城址に比定される (D.

N. Wilber, *The Architecture of Islamic Iran: The Ilkhanid Period*, 1955, No. 10)° 私達もこの山城址を調査したが、遺構が少く、山城としての機能がどのようなものであったかを確認するに至らなかった。この Shāhū-Tala の財寶はフラグからアバガに伝えられたが、アフマドによって盡く費消されてしまった (JTA. 170)°。なお Shāhū-Tala はフラグ、アバガ父子の埋葬地であった (JTA. 163)°。Shāhū-Tala はタブリーズ・マラーガ道の間であり、財寶貯藏所として好適地とされたのであろう。

さらに「集史」によれば (JTA. 169)°

〔アフマドの即位後〕三日、王子アルグンは Alāugh から歸途に就き、Siyāhkūh 方面に出て、父の財庫 (khizāna-yi pīdar) を自分のものとした。

とあり、アバガの財庫がその冬營地 Siyāhkūh にあったことが判る。アルグン自身の財庫に就いては、

アルグン・ハンはあらゆる種類の財寶を Sughūrlūq に集めたが、或は盜掠され、或は空費された (JTA. 391)°。

とある。即ち、彼の財庫は Sughūrlūq にあったのである。このような冬・夏營地の財政的側面はなお考察を深めなくてはなるまい。

以上に冬・夏營地 (乃至は移動路) に於ける即位式、クリルタイ、裁判、官吏任命、使節謁見、閱兵、財庫等の所謂國事 (dargah) に關することを述べたので、次にはオルド關係のことを調べてみよう。

オルド (ördü) 制はモンゴル特有のもので、フラグ・ウルスのオルドも四つあり、四人の皇后 (khatun) が夫々その主であった。后妃はイルハンの季節移動に従い、冬・夏營地の間を往復したので、オルド (幕營) はイルハンのいる冬・夏營地或は移動路上の滯留地に設けられた。ただ、移動中にハンがオルドを離れると、留守の後妃達は一種の兵站部 (aghrūq) を形成した。冬・夏營地では、狩獵等に出かける時以外はオルドで生活した。王族の出産、養育、死亡、哀悼もオルド内で行われた。酒宴 (tüy) やモンゴル固有の儀式もここで催された。オルドには名族の子弟の家僕 (tv-ughlan) がおり、

親衛隊 (*kashik*) がこれを警固し、幹脱商人 (*qaraq*) が出入した。しかもオルドは夫々固有の財産を持ち、それが歴代繼承された。このようなオルドが冬・夏營地間を移動するとすれば、それは偉觀であつて、Ibn Baṭiṭa の敘述する通りであつただろう (前嶋信次譯「三大陸周遊記」一〇七—一〇八頁)。オルド用の食糧 (*ash*)、酒 (*sharāb*) の調達、オルドへの贈物 (*pishkash*) は、イルハンの恩賜 (*soyurgahmishi*) とともに、冬・夏營地に於ける經濟活動を刺戟し、これがイルハンによる新都市建設の一因であつたとさえ考えられる。一方で、オルド經費の増大と移動時の糧食調達は、フラグウィールの財政を脅した。

このようにイルハンの國事、宮廷事の一切が、當然のことながら冬・夏營地の問題に密接に關連していたとすれば、冬・夏營地乃至は移動路沿いに何等かの恒久的な施設が整備されたに相違ない。ここでは宮殿 (*sarāy*) と禁地 (*qunigh*) とを取り擧げておく。「集史」によれば (JTA. 558)、『

フラグ=ハン、アバガ=ハン、アルグ=ハン、ガイ=ハンは、Alātagh, Armiya, Sughurluq, Sujās, Khūjan, Zanjan, Sarāy-i Mansuriya-yi Arrān に於いて宮殿を建て、人が住めるように、或は市場 (*bāzār*)、町を建設して繁榮させ、或は灌漑水を通そうと望んだ。

とある。この記事に關連するものとして、先ず冬營地 Arrān の Sarāy-i Mansuriya は、アルグ、ガイハト、ガザンが利用してゐる (JTA. 204, 238, 305)。夏營地 Alātagh の宮殿は、「集史」によれば、フラグ=ハンが建てたものであり (JTA. 90) Mustafī によればアルグ=ハンが建てたと言ふ (NOS. 101)。ガザン=ハンもここに宿營してゐる (JTA. 344)。なお、冬營地 Siyahkuh には Sarāy-i Muzaferiyya があつた (JTA. 218)。これらの宮殿で、現在その遺跡が確認されてゐるものは一つもなく。「集史」によれば (JTA. 7, 360) ʿAbd al-Sarāy-i Juma-Guragān なる宮殿があつた。Juma-Guragān とは、タートル部の Jūji の子で、フラグ=ハンの長女 Bulughan-Āqa の夫であり、彼女が亡くなると、次女 Jamai を娶つた人であるが、このフラグ=ハンの増の名を冠する宮殿が Hulān-Murān の遊牧地の近くにあつた

(JTA. 366)° 私ハハの Saray-i Juma-Gurān は Sughurlūq にあつたのではないかと思ふ。Mustaufi によれば Sughurlūq にはアバガ=ハン再建の宮殿があつたといふ (NOS. 64)° Sughurlūq は Takht-i Sulaimān に比定される。Takht-i Sulaimān には、前に觸れたように、モンゴル期の壮大な建造物群が残つてゐる。Saray-i Juma-Gurān もその中に含まれてゐたのではないだろうか。

禁地に就いては、「集史」によれば、フラグ=ハンが亡くなると、

Dikhwārkan の向う側にある Shāhū 山に「フラグの」大禁地 (ghurūq-i buzurg) を作つた。彼のオルドで哀悼して、彼の棺 (sandūq) をその禁地に葬つた (JTA. 94)°

とある。その子アバガ=ハンが Hamadān で亡くなると、

アバガ=ハンのオルドで哀悼して、彼の棺を Shāhū-Tala に運び、大イルハンのもとに葬つた (JTA. 164)°

とある。前にも言及したように、フラグ=ハンの財庫のあつた Shāhū-Tala は禁地とされ、フラグ、アバガの墓地とされた (JTA. 164)°

アルグン=ハンが多營地 Arrān の Baghecha で亡くなると、

彼のオルドで哀悼して、Rab' I 月九日月曜日、彼の棺を Sujās に運んだ (JTA. 226)°

とある。Mustaufi によれば (NOS. 64)°

アルグン=ハンの墓は Sujās 山にある。モンゴルの慣習によつて、見附けられないように、その山を禁地 (qurigh) とした。人々がその地域を通過すれば災いが及んだ。

とある。Sujās は Sultāniyya より西方にあり、現在ではモンゴル期のモスクを残すのみの寒村であるが、當時は多くのモンゴル人が住んでゐた。

このように冬・夏營地乃至は移動路に沿つて、宮殿が建てられ、禁地が設定されたのであるが、文化施設としては

Marāgha の天文臺 (rasād)」、宗教施設については Khoi (タブリーズ—Alatagh の中間) の佛寺 (būtkhāna) にも注意しておくべきであろう。

さて、冬營地・夏營地 (qishlaq-o-yaylaq) は全體として遊牧地 (Yūt) と呼ばれる。遊牧地の設定・配分はハンの命令による。フラグ自身がモンケ・カカンから「偉大な神の力に依り敵國を解放し、汝の夏營地・冬營地を増加せよ」(JTA. 24) という命令を受けたのである。イランに於ける冬・夏營地の創置・變更は、フラグ・ウィルスの成立事情とその統治體制に係る問題であり、豊富な水草、良好な狩獵場、快適な氣候等、モンゴル人にとっての自然條件と共に、軍事・政治・交通・文化・補給に就いての配慮のものとなされた。ハンの權威を誇示するに足る諸施設も必要となった。情報収集のための驛路 (yām) の整備は不可欠であった。さらに國防・財政の見地からの考慮が拂われた。Arrān 冬營地はジュ・ウィルスに對する防衛上の要地であり、イルハンがその地で冬營できない時は、その都度有力な部將が派遣された。バグダード冬營地に就いては、フラグ・ウィルスの財政がこのイラク地方の經濟力への依存度を高め、さらにイルハンがこの地方の歴史的な文化遺産を無視し得なくなり、ここに冬營せざるを得なくなったのであろう。

イルハンはイランの地に於いて、先ず、自己にとって最も重要で且つ最も良好な場處を自分の遊牧地として選定した。次に、イルハンの遊牧地との關連に於いて、后妃・諸王に遊牧地を配分し、さらに諸部族の遊牧地を設定した。イルハンが諸王の遊牧地を定めたことは、アフマドの「アルグン・ハンは私を實子同様に扱った。各々の息子に一人の部將を附けて然るべき方面に冬營地を定めた」(JTA. 291) という言葉、ガザン・ハンの「王子 Kharbanda は冬は Māzandarān 地域に居り、夏は Tūs, Abivard, Marv, Sarakhs, Badghis 方面に居よう」と (JTA. 348) という命令から確められよう。ガザンもホラサン太守時代には「Gurgan, Arrāk 兩河、乃至は Herāt-rūd に沿って季節移動していた。モンゴルの諸部族の遊牧地に就いては、それが何處に設定されたかは判り難い。ただガザン・ハンはモンゴル軍人に授與した iqṭā' は、彼等の通路やその夏營地・冬營地となっている地域に設定されたのである。Mustaufi によれば、クル河下流左岸の Shirvān,

Gushāstī の兩州、サフラン山北の Pishkin にはモンゴルの多くの iqta' があり、Darāvand (位置未詳、Sabān 山麓か) にはモンゴル人の冬營地があり、Sujās, Kāghadh-Kunān (Zanjān-Ardabil の間) Safīd-rūd の南) には多數モンゴル人が住んでいると言う。これらの地もイルハンの冬・夏營地の範圍内にある。即ち、モンゴル諸部族の遊牧地は、イルハンの冬・夏營地の在る西北イランの要地に重點的に配置されたのであろう。

このように見てくると、バグダードは別として、Alatagh—Arrān—Sulāniyya—Siyāhkuh—Alatagh の線で圍まれる地域は、イルハンの遊牧地 (yurt) であり、そこに税糧 (mal) と情報 (khabar) が集められ、財庫 (khizāna) が設けられ、基幹の軍 (charik) が駐し、そこからイルハンの命令 (yarliḡh) が發せられる地であったと言える。フラグ＝ウルスの國都 (dār al-mulk) もこの遊牧地の中で機能していたのである。そうであるとすれば、この冬・夏營地を要とする遊牧地は、フラグ＝ウルスの「腹裏の地」(qol-un ulus) と稱してよいのではないか。アルグンは任地のホラサンから西進して、この「腹裏の地」を手中に収めて初めて、アフマドに代り、イルハンたり得たのであった。ガザンもバイドウから和議條件の一つとしての「Safīdrūd の彼方、Trāq, Khurāsān, Qūmis, Māzandarān はガザンのものとせよ」(JTA. 291) という申し出に結局應ぜず、Safīdrūd 以西の「腹裏の地」を力で奪取した後、即位したのである。

この所謂「腹裏の地」をもう一度地形によって眺めてみると、アラス河支流の上游に Alatagh, その下流域に Arrān, Jaghatu 河の上游に Siyahkuh, その下流域に Jaghatu, Safīdrūd の上流 Qizil-Uzan の上游に Sughurlūq と Sujās, Safīdrūd の支流 Zanjān 河の上游に Sulāniyya が位置し、この地域内に、ヴァーン、ウルミヤ、ゴクチャの三湖と、サハンド、サフランの兩山とがある。そしてイルハンの冬・夏營地間の移動路は、アラス、クル、Safīdrūd 三河とその支流沿いに通じていたのである。

フラグ＝ウルスの全版圖から眺めれば、この「腹裏の地」はイランの地の西北寄りにある。これに對して東北部のホラサン州は特別區とされ、その太守には次代のイルハンと目される王子が任ぜられるのが常であった。彼は、前に述べた

ように、ホラサンの地に設定された冬・夏營地の間を季節移動していた。さらにハマダーン―バグダード路を含む地域は、經濟の重心がバグダード方面に移るにつれて、イルハンが冬營のため往返するようになり、途中に *Chaghan-Naur*, *Sultānabad-i-Jamjāmāl* 等のイルハンに所縁の場處が生じた。フラグ・ウルスの政治地理は、このように、支配者としてのモンゴル人が直接入りこんだ地域と、南イランのように多少とも間接統治に委ねられた地域とに區分して考えるべきであろう。モンゴル人が入りこんだ地域の中では、西北イランの、所謂「腹裏の地」が彼等にとって最も肝要な地域となった。フラグ・ウルスの崩壊後も、この地域にはモンゴル支配の影響が強く残った。今日のアゼルバイジャンがトルコ人の住地であるのは、その結果の最も大なるものである。

イラン史を通觀してみても、支配者集團が季節移動を續け、自らに固有の遊牧生活を維持して、既存の都市には遂に入らず、定住生活に移らなかったことは、モンゴル支配時代以前にはないことであつた。そしてイルハンが西北イランの地に自らの冬・夏營地を設定したことの意味は、この地方に於ける耕地の荒廢、都市の衰退を招いたという面だけを強調しても、充分には理解されないだろう。政治・軍事・經濟・文化の中樞がこの「腹裏の地」に集中した事實に注目すべきであろう。即ち、冬・夏營地を置いた西北イランの地は、モンゴル人にとって、最早征服地ではなく、彼等自身の本地たるべきものであつた。それはチンギス・ハンの法 (*Yasaq*) 遵守の體制であり、イルハンにとっては當然のことであつた。しかしイラン人にとっては、全く異質の統治原理の導入であり、誇るべき傳統からの斷絶と感ぜられたであろう。

勿論、イランの地に入ったモンゴル人に、定住化への機會がなかつた譯ではない。フラグ西征前のホラサン總督府には、定住への志向が多少とも見られたが、フラグ・ハンはそれを採らず、直接にはタンマチ軍の遊牧地を受け継ぎ、それを擴充整備した。ガザン・ハンのイスラムへの改宗も、都市化への方向を持つものであつたが、彼は禮拜以外には都市内に入らず、タブリーズ・西郊に *Ghāzāniyya* を作り、*Arrān* の冬營地に交易都市 *Mahmūdābād* を建て、*Ujān* に宮殿・庭園を營むにとどまつた。ただモンゴル人のバグダードへの係りは、ここでもう一言述べておきたい。アバガ・ハンの末

年から、宰相シャムスウッディーン・ジュヴァイニーとバグダード長官アターマリク・ジュヴァイニーとに對する告發が起り、アルグン・ハンの世にこの兄弟は沒落した。アターマリクは「世界征服者の歴史」の筆を折つて、バグダード復興に努力した人物であるが、その再興したバグダードの富が、アルグン・ハンの貪慾をかきたてたのである。ホラサンの名族出身のジュヴァイニー兄弟の沒落は、イランの傳統的な政治理念の後退であり、ここに素姓不明の實務官僚の登場となつた。バグダードがイルハンの冬營地となるのは、ジュヴァイニー兄弟が沒落し、イルハンがイスラムに改宗してから後のことである。しかしそれにも拘らず、フラグ・ウルスはバグダードを首都とする國とはならなかつた。

イルハンの不斷の移動は、イランの傳統的な徵稅機構と矛盾し、ジュヴァイニー沒落後も、イルハンと徵稅責任者である *vazir* との間には錯雜した關係が生じ、多くの悲劇が起つた。さらにイルハンの非定居性は、彼の權限を代行する使者 (*ilchi*) の制度を必要とした。この使者の越權行爲が税制紊亂を一層甚しくさせた。ガザン・ハンの諸改革も、モンゴルの遊牧體制とイランの徵稅機構との均衡を企圖するものであつた。

イルハンの冬營地・夏營地に就いて縷説して、西北イランの地がフラグ・ウルスの「腹裏の地」であつたという假説に辿り着いた。また冬營地・夏營地の檢討を通じて、フラグ・ウルスに特有の諸問題にも言及した。この小論を序説として、フラグ・ウルスの國制史を調べて行きたいものである。

本稿は、堀川徹氏の熱意と友情とに支えられて成つた。厚く謝意を表する。

profusion of anecdotes strung together to please the reader.

The Nizam al-Mulk had two aims in writing the work. One was to edify the unsophisticated Seljuq sultan by means of Islamic, Persian culture. The other was to defend Islamic orthodoxy against heresies.

The author takes three stories from the work and analyzes them. The protagonists of these stories, the Sassanid Anushirwan the Just, the Abbasid caliph Mu'tasim, and Sultan Mahmud of Ghazni are all depicted as models of orthodoxy. Anushirwan, especially, is deemed not only in the *Siyasat-nama* but throughout the history of Iran to have been one of the most outstanding of rulers.

The Winter- and Summer-Quarters of the Il-khans

Minobu Honda

The Mongols kept their nomadic life even after their conquest of Iran and the establishment of Hulagu Ulus there. The Il-khans, sovereigns of Hulagu Ulus, had their own pasture lands and set up their winter- and summer-quarters there. They usually made seasonal migrations between the headquarters.

These winter- and summer-quarters, respectively *qishlāq* and *yaylāq* in the Persian written sources, were founded in Azerbaijan, the north-western province of the Land of Iran. The main winter-quarters were located in Arrān and Mūghān on the lower reaches of the Rivers Aras and Kur, in Jaghātū on the lower reaches of the River Jaghātūrūd, and in Baghdād later. The main summer-quarters were located in Alātāgh at the watershed of the Rivers Euphrates and Aras, in Siyāhkūh on the upper reaches of the River Jaghātūrūd, in Sughūrlūq (=Takht-i Sulaimān) on the River Saruq, and in Sulṭāniyya at the watershed of the

Rivers Zanjān and Abhar.

The Il-khans visited Tabriz and Marāgha only on the way to and from the headquarters. However, they never entered cities and had no intention to settle down there. Furthermore, all the important state affairs and ceremonies of the Il-khans were carried out either at the winter- and summer-quarters or on their way of seasonal migrations.

We may now say that Azerbaijan, where both the headquarters of the Il-khans and the military fiefs of the Mongol tribes were set up, was the *Qol-un Ulus* (the Land of the Middle) of Hulagu Ulus. That is why Azerbaijan became the Land of Turks in due course of time after the Mongol domination.

Amir Timūr Kūrāgān—The Timurid Genealogy and Timur's Position

Eiji Mano

An examination of the problems of the Timurid genealogy on the basis of the available sources from the Mongol period and from the hands of Timur's contemporaries suggests the following conclusions. First, the genealogy of the Timurid line is probably authentic. However, what mattered to Timur himself was not this genealogical record but rather his position—which he won by his abilities—as a son-in-law (*kūrāgān*) of the khan's family and his status as *amīr* or *beg*.

But for the Timurid princes, descendants of Timur, the situation was quite different. What they needed was not a veritable account of their ancestor, who spent much of his existence as a bandit; they wanted stories full of splendor and glory dealing with their ancestors. Therefore